

ともあれ私たちは、この記事から多くの史実を知ることができます。

- 1)当時、お蕎麦は寺社(寛永寺)ならびに皇家(公弁法親王)の人たちが食べていた。
- 2)深大寺蕎麦は、公弁法親王によって広く知られるようになった。

☆日光東照宮御門主と《端午蕎麦》

『御番所日記』より

ところで、上野の公弁法親王がお蕎麦を食された時季はいつでしょうか。

一般的には、秋の《新蕎麦》とするのが妥当なところではと思いますが、時季の問題において、次の史料を注視しても面白いのではないかと考えています。

日光東照宮の**1695年**『御番所日記』五月四日に、こう記録されているそうです。～ 御門主様へ端午の御祝儀蕎麦七升献上 ～

実は、この日光東照宮の御門主様は、上野東照宮と兼職なのです。上野の東叡山の住職は、天皇家の皇子が迎えられて幕末にいたるまで、13代12人の輪王寺宮として続いていました。

したがって、『御番所日記』にある1695年時の御門主様とは、在位1690年から27年の、東叡山寛永寺の五世公弁法親王ということになります。

ともあれ私たちは、この記事から多くの史実を窺うことができます。

- 1)やはり当時は、お蕎麦は寺社(日光東照宮)ならびに皇家の人たちが食べていた。
- 2)皇家あるいは寺社では端午の節句を《蕎麦》で祝っていた。
しかもこの《端午蕎麦》は行事食として、町方の《雛蕎麦》より時期的に早かったのかもしれない。
- 3)上野寛永寺の深大寺蕎麦も《端午蕎麦》も御祝儀蕎麦であった可能性は低い。

☆道祐親王と《鶏卵蕎麦》

『大峯葛城嶺入峯日記集』より

信州大学の井上直人先生に、道祐入道親王(聖護院門跡、生没：1670～1691)の『大峯葛城嶺入峯日記集』のなかの興味ある記事を教えてもらいました。私は道祐親王の名前と存在は知っていましたが、まだ『日記集』に目を通していませんでした。

そこで書を開いてみますと、道祐入道親王が**1687年**に吉野山へ入峯したとき、穀断の御作法をする前日に赤飯と並べて「鶏卵蕎麦切」を食したとありました。

ただし、訳本には「鶏卵・蕎麦切」と記してあります。もちろん「・」は訳者が入れて「鶏卵と蕎麦切」と解したもので、原本にはないはず。なぜなら古文で

は「・」をしません。ですから、ここは素直に「鶏卵蕎麦切」と読むべきだと思います。そうだとすれば、このころに鶏卵でのつなぎの法があったこととなります。

さらには、この道祐入道親王という方は、後西天皇の第七皇子で、あの天台座主公弁法親王の弟に当たりますから、驚きです。皇家の兄弟が共に寺社においてお蕎麦を食していたのです。

ともあれ私たちは、この記事から多くの史実を窺うことができます。

1)やはり当時は、お蕎麦は寺社(吉野山)ならびに皇家(道祐親王)の人たちが食べていた。

2) 1687年ごろ、鶏卵によるつなぎ法がすでにあった。しかも寺社関係の人たちはすでにこの技術を知っていた。

☆霊元天皇と「蕎麦切恋歌」

謡曲「蕎麦」より

公弁法親王・道祐入道親王ご兄弟の父君は後西天皇(1638～85)です。そして後西天皇の次の天皇には、弟である霊元天皇(1654～1732)という方が継ぎました。

そのころ、宮家には冷泉家十四代中納言為久(1686～1741)という方が仕えていましたが、為久が霊元上皇から蕎麦切を頂戴したときに献じたという「寄蕎麦切恋御歌」があります。

呉竹の 節の間もさへ君かそば きり隔つとも 跡社えこそはなれめ ♪

とわまほし そばはなれ得ぬ 佛きざしの 幾度袖をしほりしとは ♪

君なくば 誰が袖触れし 移り香の 匂を添えて 我をたづねき ♪

このうちの最初の二首は、江戸末期の信州高遠藩の儒官だった中村元恒・元起父子が編した郷土史『落原捨葉』に収められた「五番謡曲」の一つ「蕎麦」に出てきます。

詳しいことは、『蕎麦春秋』誌に連載中の『そば文学紀行』⑥ 謡曲「蕎麦」(中村元恒『落原しゅうよう捨葉』より)に述べました。

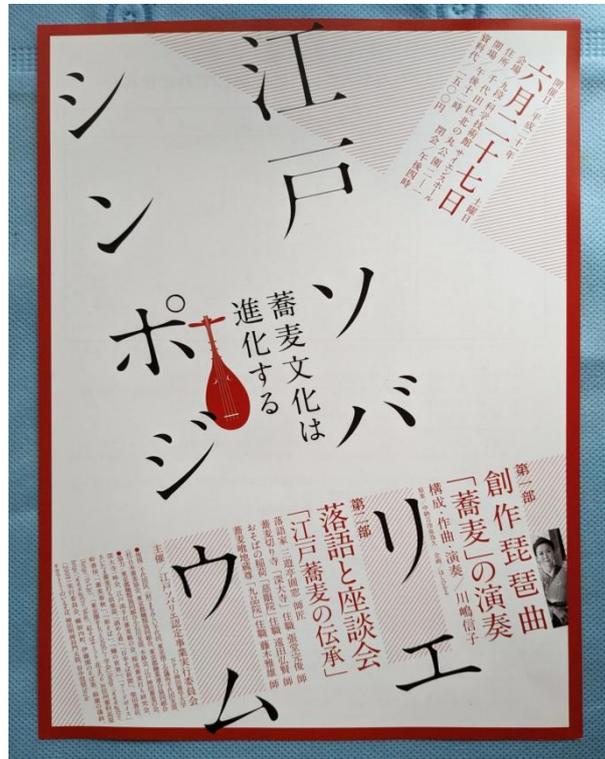
また、江戸ソバリエ協会では、この歌を平成27年の江戸ソバリエ・シンポジウムで琵琶曲(原案:冷泉為久、企画:ほしひかる、構成・作曲・演奏:川島信子)として披露したことがありました。

ともあれ私たちは、これらの史料からひとつの真実を知ることができます。

○当初のお蕎麦は、皇家(霊元天皇、公弁法親王、道祐入道親王)および貴族階級(冷泉為久)の人たちも食されていた。

以上が「史料に見る皇家のお蕎麦」の結論です。

そうしますと、巷間に染みついている、「蕎麦は庶民の食べ物だった」という勘違い、あるいは「蕎麦は江戸後期に下級な屋台から始まった」という間違いは、いま改めなければならぬでしょう。



(デザイン：中村奈保子)

余談ですが、「庶民」とは「諸民」とも書きます。つまり「諸々の人たち」、「その他大勢」という差別的な語です。なのに私たち庶民は謙虚なのか、素直なのか、この言葉を好んで取り入れている節があるところは、皮肉なことです。この言葉ももう改めた方がよいでしょう。

《完》